コロナ禍の下での大地震の備え

東京で「防災フォーラム」開催　オンラインで配信

新型コロナウイルスの感染拡大の下での首都直下地震・巨大水害などをテーマにした「防災フォーラム」が9月、東京都墨田区の都慰霊堂で開かれた。コロナ禍の影響を受けて、「無観客」形式にしてオンラインで配信。想定される被害や過去の事例について専門家らが報告し、減災のための備えについてアドバイスした。

「一つの災害が収まる前に次の災害が発生すると、復旧復興に時間がかかり、間接被害が増えていく。人的被害を減らすためには、家族がそれぞれ防災について意識しなければならない」

フォーラムの初めに東京都立大学名誉教授の中林一樹さんが、こう発言した。国は首都直下地震対策特別措置法を2013年に施行したが、東京で大規模地震が起きた場合、被害は「東日本大震災や南海トラフよりもさらに拡大する可能性がある」。国の想定（2013年）では、最悪の場合、死者2万3000人、経済被害は95兆円。災害廃棄物については、ビルや家屋の倒壊で発生するコンクリートガラは6000万トンと推計されている。

コロナ禍の中では避難所も密閉・密集・密接の「3密」を避けなければならない。「国や行政がそうした事態をきちんと想定し、避難所の増加を考えるべきだ」と中林さんは強調する。

災害時に市民はどう行動すべきか。名古屋大学減災連携研究センター教授の西川智さんは「一日前プロジェクト」について説明した。被災者や災害対応をした人に「災害の一日前に戻ることができるとしたら何をしますか」との問いかけをし、話の中から「身につまされる小さな物語」を生み出す活動だ。

西川さんは、内閣府の参事官時代に災害予防を担当し、新潟県中越地震（04年）などに関わった。「過去の教訓が共有されていない」と痛切に感じて同プロジェクトを発案。内閣府の事業として05年に始まった。

東日本大震災による津波で家を流された60代の女性は、いつも使っている小さなバッグだけを持ち、着の身着のままで逃げた。バッグには財布、保険証、診察券、お薬手帳などが入っていて、避難生活に役立ち、「大事な物はひとまとめにしておくといざというとき、持ち出せる」と振り返った。これらのエピソードは、内閣府のサイト（防災情報のページ）で公開されている。

「こうした体験を『わがこと化』して日ごろの備えに生かすことが大事。まちづくりや音楽など、防災と何かを組み合わせると長続きする」と西川さんは提言した。

国立研究開発法人・土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター主任研究員の大原美保さんは、今年6月に刊行された「水害対応ヒヤリ・ハット事例集」を紹介した。

地方自治体編では、過去の災害の検証資料から、地方自治体の職員が「困る・焦る・戸惑う・迷う・悩む」などの状況に陥った事例をまとめた。別冊の新型コロナウイルス感染症対応編では、コロナ禍における水害発生時に起こり得る事例と望ましい対策について「避難所が満員になる可能性があり、避難先は学校や公民館だけでなく、安全な場所にある親類、友

「世界みらクル音楽祭」と名付けたコンサートもあった＝東京都墨田区の都慰霊堂で9月5日

「無観客」のオンライン形式で行われた「防災フォーラム」＝都慰霊堂で9月6日

人宅も含めて考えておくといい」などと記載している。

一方、一般社団法人「社会応援ネットワーク」代表理事の高比良美穂さんは、東京都荒川区が、区立中学に防災部をつくってジュニア防災リーダーの育成に取り組んでいることなど実践例を挙げ、「自助と共助をはぐくむ防災学習は教育の基本」と話した。

同団体のオリジナルの教材もあり、その一つが小学4、5、6年対象の「防災手帳」だ。身の回りで起きやすい災害、いざというときに取るべき行動を、子どもたち自身が考えながら書き込んでいく。教職員向けの指導書がセットになっている。東日本大震災で被災した福島県南相馬市立小高小学校などの協力を得て製作され、いずれも同団体のサイトからダウンロードできる。

今回のフォーラムは、「首都防災ウィーク」（9月1～6日）最終日のメインプログラム。同ウィークは中林さんが実行委員長を務め、都立横網町公園や園内にある都慰霊堂で実施してきた恒例の防災企画だ。今年は「3密」を避け、テレビ会議システム「Zoom（ズーム）」を利用した「みらクルTV」と連携して開催した。みらクルTVは市民有志の配信活動で、同実行委事務局長の木谷正道さん（72）＝元都職員＝らが展開している。

フォーラム前日は「音楽で人々の心をつなごう」と、「世界みらクル音楽祭」と銘打つコンサートがあり、全盲のバイオリニスト、白井崇陽（たかあき）さん、やはり全盲のシンガー・ソングライター、大石亜矢子さん、木谷さん率いる「心の唄バンド」のメンバーらが登場。また、ズームを通じて韓国や台湾からの出演があり、動画共有サイト「ユーチューブ」でもライブ配信された。

横網町公園は、関東大震災（1923年）で多数の市民が犠牲になった旧陸軍被服廠（ひふくしょう）跡地の一角にある。当時、近隣の約4万人が避難したが、炎や熱風による「火災旋風」が渦巻き、3万8000人余が命を失ったといわれている。また、公園内には、震災時のデマで虐殺された朝鮮人犠牲者の追悼碑がある。

過去から学び、東京を耐震都市にすることは急務だ。木谷さんは「コロナ禍を経験した私たちは、次の巨大災害を現実として受け止めることができる。IT（情報技術）を活用して心をつなぎ、防災の輪を広げたい」と力を込めた。